

Seminar Report

きみ外科セミナー in 徳島



2018年3月31日、JRホテルクレメント徳島（徳島県徳島市）にて、第11回きみが外科医になる日セミナーが開催されました。医学生や臨床研修医を中心におよそ160名が集まり、最前線で活躍する外科医らの話に熱心に聞き入りました。

患者に届いて初めて「成果」と呼べる 求められるは“破壊的イノベーション”

特別講演では、日本で有数の小児外科手術実績を有する順天堂大学小児外科教授の山高篤行氏が小児外科医のやりがいと魅力について実際の症例や最新技術を用いた手技映像を交えて紹介しました。

続いて、北島政樹氏（国際医療福祉大学 副理事長、慶應義塾大学名誉教授）が登壇し、アジアで初めて手術支援ロボットda Vinciを導入し、国内での開発研究にも携わってきた経験から「医工連携を推進できるのは外科医である」と語りました。

今後、ロボット手術や移植医療が推進されるなかで、チーム医療と破壊的イノベーションは欠かせないとしたうえで、その根底には患者を思う「温かい心」が何よりも重要であることを強調しました。「患者に届いて初めて成果と呼べる。若い先生方もぜひ挑戦してほしい」と未来の外科医たちの活躍に期待を寄せました。

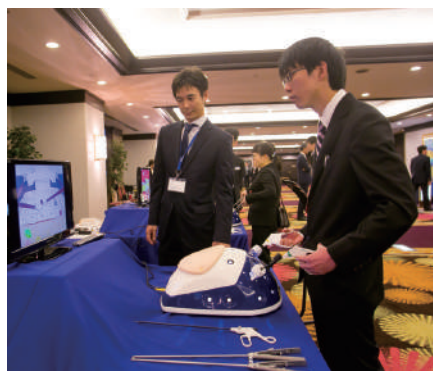


日本一厳しい外科のママ外科医の実際 ～目指すは両立でなくキャリアアップ～

女性外科医のセッションでは、演者の1人である高須千絵氏（徳島大学消化器移植外科 講師）は研修医時代の手術経験から外科医としての喜びややりがいを見出し、直感を信じて「日本一厳しい外科」といわれる徳島大消化器・移植外科への入局を決意したことを振り返りました。専門医と学位の取得、留学などを通してキャリアを積み重ねながら、結婚・2児の出産と育児を経験するママ外科医である高須氏。妊娠判明直後から、臨床と研究継続できるよう、複数主治医制の導入や自宅で病理診断ができる体制整備など、医局側からの厚いサポートに助けられたことを紹介しました。

また、新しい技術の導入により、座位で執刀できる手術や重い機材を扱わなくても可能な手術が増えており、体力面でも女性に優しい手術環境が整ってきていることを紹介し、「仕事と家庭の両立を目指すのではなくキャリアアップを目指していきたい」と力強く語りました。

そのほかの演者を含め、外科医たちの熱い講演内容を聞いた参加者は、講演後に先を争うように展示ブースで手術ロボットの模擬操作を体験しました。目を輝かせながら話に聞き入っていたセミナー参加者の高揚感が会場内に充満したまま、盛況の内に「きみ外科セミナー in 徳島」は幕を閉じました。



Spring 2018

CENS News Letter

CENS ニュースレター | 特定非営利活動法人
日本から外科医がいなくなることを憂い行動する会

徳島大学大学院医歯薬学研究部
消化器・移植外科学 教授

島田光生先生
インタビュー

Seminar Report

きみ外科セミナー
in 徳島

厳しい時代だからこそ
あえて厳しく――

外科ブランド
確立を目指す



厳しい時代だからこそあえて厳しく—— 徳島ブランド確立を目指す

徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学
教授 島田光生先生



全国的に若手医師の外科離れが進むなか、とくに地方の大学では厳しい外科医不足の状況が続いているといわれています。そのような状況にありながらも、若手医師に対して着実に臨床並びに研究指導をし、数々の業績を上げている徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学教授の島田光生先生に若手医師の育成に関する考えや取り組み、若手医師への期待について伺いました。

——徳島の若手外科医を取り巻く環境について教えてください。

島田 中四国地方は北海道と並んで全国で1位、2位を争う帰学率が低い地域です。さらに外科医に関しては、最近の医学生や若手医師から敬遠されがちで、厳しい状況があります。

ひと昔前でしたら、とにかく猛烈に働くことが美德とされてきました。しかし昨今、医師においても働き方改革が叫ばれているように、若い世代の中ではワークライフバランスを重視する傾向がより強くなってきています。

外科医は3Kといわれる労働環境がありながらも、実際にはやりがいに溢れる魅力ある職業です。しかし、日本では、欧米のように給与等の待遇に関して大きく優遇されているわけではありませんので、「努力や労力に対する対価に見合わない」と考える若者もいるようです。

——そのようなシビアな状況の中でどのような姿勢で若手の指導に当たっているのでしょうか。

島田 制度的な部分については我々の努力だけでは動かせませんが、だからと言って、何もできないわけではありません。心がけていることの1つは「あえて厳しくする」ことです。これから人口減少の時代を迎え、それに伴い外科手術も減っていき、病院も集約されていきます。だからこそ、四国に必要なのは一流の外科医です。

自分の家族が患者だった場合を想像してみてください。患者としては、東京や大阪に行かなくてもきちんと手術をしてくれるところがあるのならそこを選ぶでしょう。私は

若手にとって、とても厳しい教授として知られていますが、私が30年かかってやってきたことを一早く習得してもらうためには必要な厳しさだと思っています。

——具体的にはどのように若手医師を集め、指導しているのでしょうか。

島田 大変な時代だからこそ、たとえ年間数名であっても「やってみよう」と真剣に思ってくれる医師に来てほしいと思っています。そういった人材を育成し、今の時期だからこそ、外科の徳島ブランド作ることが重要だと考えています。そのため、入り口には厳しい基準を設けています。また、指導に関しては私が毎日回診に出る中で、患者に真摯に向き合う姿や患者への温かい表情を見せるよう努めています。



——厳しい指導をより効果的なものとし、若手のキャリアニーズに応えるためにどのように体制整備をされていますか。

島田 多様なキャリア形成ができるよう、当教室ではさまざまなコースを用意しています。基礎研究を志す者もいれば、専門医取得を目指す者もあり、それぞれに対応するコースがあります。また、臨床研修後に社会人大学院で2年ほど研究に従事し、その後関連病院で臨床経験を

積みながら学位とれるシステムも作っています。そのため、医師が研究に専念できるよう、複数名の研究補助員を導入しています。

また、女性医師の活用にも力を入れています。今回のきみが外科医になる日のセミナーでも発表させていただきましたが、2人の子育てしながら、留学も経験し学位も取り、現在講師職についている女性医師がいます。出産育児の間も業績が途切れないう、遠隔で研究に参加できる体制も作ってきました。

一人ひとりの顔が見える強みを生かし、 小さなところから成功体験を積みせる

——そのような体制づくりが基盤となって、数々の学会発表や論文などの業績につながっているのでしょうか。

島田 体制づくりに加え、我々の教室は大規模なところとは違い全員の顔が見えるという強みがあります。一人ひとりの性格を把握しているため叱り方も異なります。それぞれの特性に応じた役割を与え、小さなところから成功体験を積んでもらうことを心がけています。

現在、当教室には日本消化器外科学会の評議員が7名います。当教室の規模を考えますと非常に価値のあることだと思います。このような実績を出すためには、業績が認められるように組織として計画的に導いていく必要があります。

——一連の体制づくりと指導を通してどのような外科医の育成を目指していますか。

島田 私自身が常に念頭に置いているのは、脳外科医の父であるハーヴェー・クッシング氏が提唱した“Academic Surgeon”という姿です。その要素には7つあり、第一に「Researcherであれ」と謳われています。これは単に基礎研究に従事するという意味ではなく「研究的思考を持った医師であれ」ということです。百数十年前に言われたことですが、現代にも通ずる考えであると思っています。

ただしその前提として、よき人であることが医師としての最低条件であるという考えがベースにあります。人間形成あつてのAcademicな活動であり、組織としては切磋琢磨しつつも、「和を以て貴しとなす」の精神を大切にしています。

「Academic Surgeon」 Harvey W. Cushing (1869-1939)

1. He must be a researcher.
2. He must be able to inoculate others with a spirit for research.
3. He must be a tried (reliable) teacher.
4. He must be a capable administrator of his large staff and department.
5. He must, of course, be a good operating surgeon.
6. He must be co-operative.
7. He must have high ideals, social standing and an agreeable wife.

——とはいっても、よい人格の形成を促すことは簡単ではないと思いますがいかがでしょうか。

島田 正直難しいと感じています。一般的な教育では補えない部分です。私は教室のメンバーは家族だと思って接しています。たとえば、何事も「できない」からスタートするのではなく、「YES」を前提に考え始めることや、大事な先生に対する御礼の手紙は手書きで書くことなどといった、まずは人としての基本的なところから伝えるようにしています。

——今後の若手外科医に期待することは何ですか？

島田 どんなに小さくてもかまわないので、まずは自分なりの覚悟を決めてほしいと思っています。その上で、Academic Surgeonとしての知識や技術に加え、マネジメントスキルなどのノンテクニカルスキルを育み、小さな役割を果たすところから経験を積み重ねることで、よりよい医療につながるアイデアを出せるリーダーへと育ててほしいと願っています。

